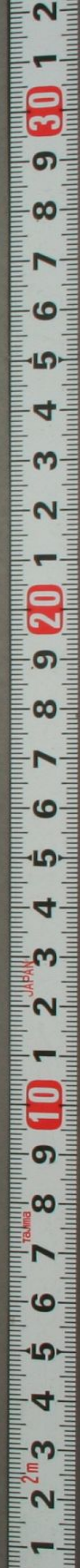




中村俊定文庫
文庫 18
396



孫子兵法

山溪

續雨夜稿

序

賦夫の寶玉にまきれるは雪積の河沿ともしり
 つけれと似て而れなる人の言葉のはひこし
 は長く風流の道のまよひとすれりさ小や我家
 の休道は梅花仙在世に説尽し玉はひく何
 と無用の唇を敷むや謀におそし悔むし
 人を教誡するはあのか休閑を歩きしん
 には孰^い恙と鴉^い解に楚の曉を /



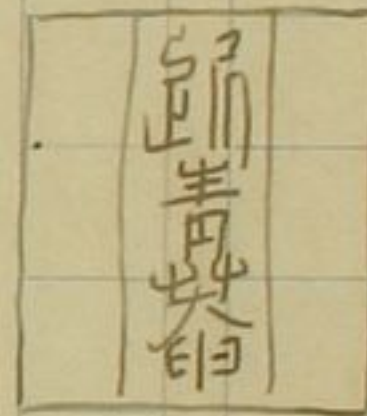
No. 2

一或人問曰許六は蕉門の二世といふ人あり其
 中へありや予答曰我ハ殊とたり俳人のい
 ふこと有り許六は超然たり才絶倫の識多特
 異能く人の名れり所由得て蕉門に名るの一
 人なり予此と云風亭根柢の序に云風の血脈
 を慥に相授する者は潮東の門人なり故に以
 書考根柢と名づくは私なりをのが癖を一
 線に立小はこ極考根柢とはいへりさあぐハ
 云風柢の上は何と考根柢あるんや
 人くあて酒天童子や冬ニモリ

七三



近青卷



六法燈を傳ふへさか許さる蕉門の二世と
 兼好は行脚する者の夢詞有り許さか
 兼好は自澄も許さか手テ燈アキも六塵一實と之れ
 以自在人にして天道の恢々たるを
 知る言流の夢にのみ泥めは井の中
 に手足を動して許さる蕉門の二世と
 誤る蓮ニ老師ト曰蕉門の十
 哲ハ去来抄凡は夢境を写し洒堂ハ
 俗談とあつた許さるを
 知り越人のなくりを得
 て古箱も此中の働さには及ハす
 さ小と抱

下句にて癖の考根跡跡小たりし
 かり蕉翁の血脈を嗣人とはいふ
 へか凡抱の土許さる日井伊家
 に仕へて抱の職あり俳道は中品
 以下凡雅にしてあらず御に入
 たり林童跡先も俳諧に遊へハ
 されと教誡する人は穉望に
 吳天の雲をいふさ菅に唐崎の
 雨をしのいで早瀬西泊す然る
 に許さる生前に禄を給て行脚
 の沙汰ありハ許さる俳諧の達人
 たりとも箱俳諧の跡を付属し
 王ハんや假令箱付属し王ふとも
 仕官懸命を余所にして許

報了了大印は發願文の名利解より見るとし
 砂よ麦まく雲の冬枯
 組討のあかしと歎く道心看
 又看
 の麦のさひゆりたる寒さを一句の新
 ミと足つりて砂の一字は句の眼を水は陳の
 組討と趣向にし歎くは枯の字に答へり
 組討に骨折せたる孫殿
 許六
 膝頭は前句に入らず所句の藤細はこれらの
 句にて見之たり然るに許六曰組討の蓮生法
 師ハ六百年以前の古口たり

の人を宗匠にす小は百韻句なかなる面々の
 一やうにて五句後には間にくしト略右十指の
 得牛を合せて大成するは果花先師たり小はこ
 そ翁遷化し王子後は十指七子と果花先
 師に文墨を弟人なく而凡正統の傳來を信
 仰して夷語に果花先師の言凡と慕ふて教誡
 をうくる事は野知として今も人のし小の所
 有り然れは燕門の二世は黄山の梅花仙にし
 て嗣法の心印ハ七部の選集に知り任りしき
 事ハ十指為年抄の難波の書状にあり師恩を

新編 甲州早稲

前作
 花咲ぬやい動よき柳かな 宇中
 花咲ぬやい動よき柳かな 麦林
 花にまけたる柳のすかゝる流勢さいわかふ
 るもいとしほをうん
 すほえりとも流勢のうひたしわるに鞠
 流勢をうひたしは博識の跡といわたりさこ
 動くは柳の春情をう花にまけん此をすほ
 めるとり作者のつりたる情にして柳の春
 にはあはれ字中か作勝といはんかされ
 ハ詩に奪胎擗骨といひ歌より哥をとると

一南北新詠
 さまくは品かいらたる妻を——
 了す世の果は苦小町なり 翁
 恋に小町古しと難す、さか前句よりあこす
 趣向有し然るも教養と古しといふ
 へのく凡許か明敏にかゝる筆端の失れお
 しあしとく、蕉翁の俳諧に「天不河」
 階而升ハシラフ、まものは是等の妙にして「飛花落葉の紀
 念」上お苦提の種は小町の一句に過すとい
 ふし
 新詠 甲州形抄製

直しは鴨ヒヨトリのおとして遊了橋かなと有記か
 前作あり鴨は花についで花を惹ひせは落の
 字うにかすといふし
 一或人 扱て作る句情といふ事を専ら教とん
 其法常銘守武のニ老も傳つとをり水は貞
 徳と室のニ生もいハすまして我家のおひ
 享式をえらむ王と其河法をししかうハ
 介別才をて人をすとりはといふし
 その作と之水は
 ○大小を喰はにおくハ流石なり

いふはその道とまあ一條方水と水階に是
 のくよき事とまい、人の骨折たる趣向は
 ありと相らぬ真意に真とくせし信天の符の
 字り落すに似たらん凡雅は人との志しを
 述ははる日其時の秋無の趣きとり重
 府より出るは杜工部か看望西上人の富士
 の烟を芭蕉翁の辛崎の花のことと才泉の作
 にはいたり難からん
 一全 眞の笠をしたる橋かふ
 といふ句を眞の橋おとして遊て行といふ
したい

新編 甲州 印刷 製

○奥の世界を底にまかす子
 ○年忌に堀た墓^{イモ}をにかした
 是等の作例日々夜々につらハ難改に何
 某俳人のことく句毎にはんし物とたうて
 果日三又圓扇のもやうに書^書れそよ秋風に
 捨^しれこは日樂燒の手にわたる行未^未は煤
 掃^スの持籠^{モコ}に乗^乗て岸^岸西岸の流氷に沈む誠
 に慎むへきは人情の行違怖^怖るへきは我慢
 の深さより明熱の師の龜^亀鎧に背き俳門の
 異端^{異端}とほきれり

新編 甲州新刊

千の矢は笈にかくれ^れて短^短の聲 涼袋
 我乳の者^者とほ足^足之ぬ忠守かなとハ座^座真^真の
 リや^や之^之にして笈の中^中の東^東尊^尊はを^をの^のか^か作^作に
 達^達ふ^ふさ^さ小^小や^や六^六道^道結^結化^化の^の師^師に^に達^達て^て再^再ハ^ハ眼^眼を
 開^開き^き俳^俳情^情は^は俗^俗談^談平^平話^話にし^して^てそ^そこ^こに^に聊^聊雅^雅情^情
 あり^{あり}と^と悟^悟ら^らず^ずは^は終^終に^に黒^黒山^山鬼^鬼窟^窟の^の作^作者^者と^とな
 る^るへ^へし
 一古雅談 舟^舟ハ^ハし
 桐の木に鶉^鶉鳴^鳴なる^る堀^堀の内^内
 抽^抽の花^花にあ^あか^かし^しを^を忍^忍ぶ^ぶ神^神理^理の^の問^問

右の二句を尋てに。廻しといへり。廻しある
 中へに丹。廻しをつくり。古さは。此二字の外に
 教多。廻る。手紙。波字ありて。いつれも。皆一格に
 立。ち。や。是。は。決。して。廻。ら。さ。る。な。り。強。く。廻。せ。は
 桐の木の意味に大に遠いあり。なん。早。花。走。師
 曰。再。撰。す。る。に。此。切。は。和。哥。に。も。我。を。な。く。に
 のとき。未。略。く。す。の。く。の。思。ふ。も。ち。す。し。張。中。へ
 に。欠。た。し。を。免。に。し。わ。れ。を。な。く。に。誰。中。へ。に
 が。み。た。し。を。免。し。我。心。は。君。中。へ。に。み。た。し。し。水
 と。季。吟。を。人。の。註。し。玉。子。を。こ。る。し。我。を。な。く。し。

く。よ。は。よ。に。心。を。免。く。し。て。我。心。は。君。中。へ。に
 た。し。し。水。と。な。り。儒。士。何。某。か。説。に。干。旅。ハ。共。に
 よ。の。假。名。よ。て。反。了。所。に。つ。か。み。字。有。う。と。有。木
 は。漢。の。助。漢。も。傳。の。手。紙。波。と。干。旅。の。つ。あ。い。や
 子。は。趣。相。お。な。し。と。い。い。ん。然。る。に。作。鷄。の。智。を
 して。大。鵬。の。教。を。猜。み。此。二。字。の。外。に。教。多。廻。了
 手。紙。漢。字。あり。と。い。ふ。も。一。ツ。に。菽。友。を。あ。か。た
 す。強。く。廻。せ。は。桐。り。木。の。意。味。に。大。の。遠。い。あり
 ち。ん。と。蕉。門。の。俳。諧。を。え。く。し。て。欠。た。し。に。黄
 なる。端。を。動。し。て。初。字。を。ま。と。り。ん。神。風。や。伊。勢

新編 甲州屋特製

た^い過^ぎ當^{たう}といふ一し
 春もや、気色と、なふ月と梅
 冬籠中と考^{くわう}花^けりん比^ひはし
 象^{しやう}議^ぎ云^い前^{ぜん}章^{ぢやう}の春^{はる}色^{しき}は凡^{ぼん}雅^やの^の一^{いつ}種^{しゆ}に^にし^{して}下^か略^{りやく}
 此^{こゝ}句^くは一^{いつ}種^{しゆ}と^とい^いふ一^{いつ}句^くは^は一^{いつ}種^{しゆ}と^とい^いふ
 ハ字^は子^しに汚^お穢^{たい}あり^{あり}な^な、名^な人^{にん}の象^{しやう}何^{なに}と^とい^いふ
 一^{いつ}し^しや^や一^{いつ}切^{せつ}字^じに大^{だい}事^じあり^{あり}古^こ今^{こん}何^{なに}に^に人^{にん}の^の用^{よう}
 一^{いつ}字^じお^おへ^へさ^さる^るし^し何^{なに}れ^れん^んの^の之^{これ}を^を習^{しゆ}ふ^ふへ^へか
 る^るお^おは^はた^たと^とハ^ハ敬^{けい}して^{して}遠^{えん}さ^さく^くと^とい^いへ^へる^る神^{しん}
 助^{すけ}の^の河^か法^{ぽう}と^とい^いふ^ふ一^{いつ}さ^さな^なり^りと^と
 十^じ五^ご

の^の国^{くに}に^に生^なれ^れて^てか^かく^く僻^{へい}る^る心^{こゝろ}を^をも^もた^たは^は神^{しん}明^{めい}と^と
 か^か首^{くび}に^に包^かく^く王^{わう}い^いん^ん一^{いつ}お^おそ^それ^れに^に悟^ごむ^む一^{いつ}し^し
 俳^{はい}諧^げ象^{しやう}議^ぎ
 俳^{はい}諧^げ古^こ今^{こん}何^{なに}に^に象^{しやう}議^ぎを^を定^{ぢやう}む^む象^{しやう}評^{へい}を^を定^{ぢやう}む^むと^とあ
 る^るは^は古^こ今^{こん}の^の明^{めい}哲^{てつ}に^に對^{たい}して^{して}時^{とき}宜^いの^の詞^し有^あり^り海^{かい}
 内^{ない}無^む雙^{じやう}の^の尊^{そん}師^しす^すら^らか^かく^くの^のこ^こと^とし^し然^{ぜん}る^るに^に比^ひ
 俳^{はい}諧^げ象^{しやう}議^ぎと^とハ^ハ象^{しやう}議^ぎ決^{けつ}定^{ぢやう}し^{して}こ^この^の題^{だい}号^{ごう}な^なり^り當^{たう}
 世^{せい}何^{なに}人^{にん}と^と象^{しやう}議^ぎす^する^るや^や各^{かく}の^の句^くに^に我^{われ}室^{しつ}の^の象^{しやう}議^ぎ
 を^をお^おそ^それ^れさ^さる^るん^んや^やと^と書^かく^くを^を見^みれ^れは^はを^をの^のか
 郷^{きやう}人^{にん}と^との^の象^{しやう}議^ぎと^と聞^きえ^えたり^り自^じ撰^{せん}の^の号^{ごう}に^には^は甚^{しん}
 新^{しん}報^{ぱう} 甲^{けつ}州^{しゅう} 刊^{かん}行^{かう} 製^{せい}

洒をうしろに出たる雪見哉
 一
 事話両談して時雨の夜の淋しきまな
 てあつましき宿ともあふハ一爐の采火に
 正のなうん着^し挨拶の脇を^しハ^し燒火に寄
 し火の影を面白か^うハ比^叡や爰^岩の加の
 は燒火は不断にして面目きの字詮なし但
 て一句もた^しす又燒火に影とはかりな^う
 もあふと影のとは人か物が影不落着にし
 さる^る眼に面白^きと^し承^背けり^遠ハ附の^怪
 音より小夜時雨のいと、淋しき余情あり

象徴の脇ハ發句のかけたる所を補ふといへ
 リ古今抄に眼は発句の情の言外にあまり
 て詞のた^くぬ所をおきなふとあり然るに
 かけたるとい古今抄の詞をもとくの^ら
 かけると余情とい一介八問の遠^らといふ
 一しかけたると覺えたるか^う
 木の葉か^う音をゆつるや小夜時雨
 燒火に影のおもしろき宿
 新猿此夕讓^法夜^といふ句作に似て落葉の
 音より小夜時雨のいと、淋しき余情あり

新編 甲州屋特製

象議に發句は淋しきあしの音を呱けしき夜
 とも聞けりやとは壁との旅寝とその姿と足さ
 ため古郷を思小下心とさつして旅寝の存も
 野つゝさなるその庭も荒たふ秋なかく萩を
 とりて趣向と定め純子にかはる下卧へ句作
 け句の余情を察して壁との旅寝と足て純
 子にかはる下卧へ趣向とし萩は當季の
 句作むし鳴庭のさなり象議ハ趣向と句
 作のとり邊ひといふへし脇は發句のかけ
 たる所を補ふと覺えたる誤も復へ之えたる

寒さを技にむせ^せて冬
 裏は酒花に富貴なるとまあうてりす
 は雪足とあまたるは東坡が望の凡縁はし
 うす誠に寒さハ余所の凡情なごへし脇の
 鳥は北方鳥鳴人以為怪とあハハ鳥は怪鳥
 の類山林に棲ものなり聊も市中の情なし
 寒さにあせるとは雪の字にはまりて雪之
 の詮なし
 呱けしき夜とも聞けりやあしの聲
 純子にかはる萩の下卧

と
 象議に其場は是ニ掃くへて曲突のいふ
 一石の竹をすりしく籠細工
 氏才は東西夜流の評矣し象議子及び
 渡し字提子足ゆる人侍て
 抱優自在とつゝさておもき詞あり
 衣を抱優とぬたゝ抱おこゝろと思おにや
 門前の茶衣存にしはらく馬と繋て休
 一事をくけす欲果するをいふしわを奪
 や遊優ハ閑假之意心内外物に繋縛せらる
 一事をくけす欲果するをいふしわを奪

笠寺や乘散あさます一すゝ之
 其角
 裁ものに麻の切はしよろこびて
 翁
 象議云如是茶句といひ脇といひ其時その場
 の抱優なるを裁もの、無情に趣向を立玉
 へるなり
 象議は胡柳マハ渾ハ園ハ居ハといふへし一涼之もふ
 たりしていさも世情なりさるを完句も脇
 も抱優にして才三はわく世情と心得たる

新編 甲州形

松風の暮やしつめて藤の花
 是尋を以て心得ありし
 詩歌連体は比喩物して其情を述るなり
 閑雅麟趾ハ尊歎^ノま真して文王大似の徳を
 詠し王仁は難波の栂に大鷗^ヲの空と詠誦し
 目にはは足て午にはとらぬ月のうさの
 つらのことオ君にそありけるとよめさハ
 月中のあつらに女を副^クたり名は高く聲
 ハ上なし時鳥とニ條大岡君を時鳥に花
 ぬんとある栂の句いやつしんく何某

龍細工の附句にそこす掃くへて曲突のい
 ふるといふ趣向ハ大工小屋に鋤^カ肩を掃く
 へると附るもあやし事ハ神の河法は遣て
 一向初心の人もかゝる無下なる事はいふ
 ましとの命の附もや象徴てし水たり
 象徴云挨拶の句人を月日にあかまへ我を鳥
 くに早下する事物によそへて時宜をとく亦
 ふへりかと其義句を請たる人の殿するにこ
 まるなるへし色之妙ある^也巻に候せし
 時

句とて何れを逆サカシメの事を定めんや
 帷子もまゝと捨すてぬぬ秋あきなり
 とうわさ心つげこころ了しる障まじ子こ
 象漢云作者曰吹の俳諧にへたて子の初
 心こころなり
 障まじ子こといふ世説いふへたてたる子ハ
 わけを氣とつげと添削すし十論に先手
 後手といふ事あり帷子もまた捨すてぬと
 いふ冷暑のさかさぬぬに夏子を趣向にしへ
 たてたる子といふ先手なりわけを氣とつげ

詠候を揮謁せしたくひ古今こゝろ枚挙まいきよに及ば
 ず然るに月日をもちて挨拶にすすハ腸はらすす
 に二するとハ俳諧の大逆をしらすしてを
 のかみ自在より初字をすとはすといふハ
 し刺座之吹を謹接きんせつに屯る子伊徳を滅して
 他門の嘲あざわらりめり之ぬ放言なり王荆公
 好この貴き花はな釣つり魚うい宴う食く釣つりいひ清輔朝臣は河水久
 澄すみといふ題をよこおく水みづと希面有しとな
 り即興も沉吟もその日暮時の暈といふハ
 し聖經言不可い以い若わ是これ其これ幾いかに侍し水みづハ挨拶の
 新編 甲州 俳諧 類

の一文字ハ趣向（一）なりて跡の句作ク附と聞
 中よりなり足ふく附は四ツ手附ヤとて今
 の蹴踏には嫌ふなり使ハ趣向にして尤の
 あり寺も嘘の字に答てよしといふ一し
 畧談云趣向の立も句作の附も其場との時の
 足はかゝひよて例の疎くも親くもあつし
 惟る事と足へ棄する時は前句附とおなし
 の了一し
 附の事と足へ棄する時は前句附とおなし
 とハ誤りなり附方といふ附合といふ附句

ハ後手なり近才吟味上手といふ句あり
 上手世間上手といつと味上手といふ世
 詠は奇し蕉門の詠は二十年來の世詠さへ
 用すましてけふ頃のつくりを用人や初
 心の心得ありし
 子どもの嘘の尻も結はす
 大のあつ寺へ使をいれりて
 象謙云是は使の一文字の趣向にして跡は足ふ
 く前へ附たりもなり
 跡は足ふく前へ附たりもなりとハ使

了ことく醫家の良を誉たる挨拶の句なり
 腕
 紅葉と詠るその場を趣向に定て萩の巻と
 はわひしき信辰の時直なり月は尊影の移ひ
 にしと草枕の驚きといふ一
 西谷詠 花にやむ我こゝろ 惱花我心
 花に顛倒なり花に殺我心のこゝろ存ふ
 花に心なるし
 腕の足大工はつりぬとのとや
 象徴よび句の大工は新舊の式とも
 といひり大工は新舊の式とも

といふ句毎に附く趣向を定て集せし
 句と句作へすを道句會秋といへとすこし
 く折るけいほ詮平し蓮二先吹日念句も
 附句も趣向の先にして句作は後の表なり
 事としるしと前句附とあはしといひか
 俳諧の前句の姿を定て趣向を定るなり
 前句附は耳に聞て理屈を以て附るなり
 詠の趣向を定ると前句附とは見聞の遠い
 あり又句作の附くはとあるは誤なり附く
 とい趣向なり句作には繋きひきき句ひの聊

然の如所とまさしく道諦の如翁ハ句ニ
 とは自然該相違右リ但し句意通せされハ自
 存かう爰に高翁の附句に象議をいそる、
 春色の句冬籠の句蔵物の方三に象議を書
 句な〜は我輩の象議をいそれ〜や
 象議去是自然の妙所にし〜本より高翁の附
 引たて、無理に舞するたをやかす
 眠ふたに星のこけりか、れり
 自然あり翁白^馬上^馬日^馬附^馬く^馬下^馬手^馬ハ^馬附^馬了^馬附^馬
 ハ自然あり

句にかきう人倫を越えし初心の人象議
 に違ふへからず象議に翁に物を書とい〜
 は難なりとい〜り翁に物を書とい〜
 とはありはりたし季に用あり^馬夜に
 用ありし
 二月の月の本は古今抄に委し象議に及は
 す
 蜻蛉ハ何の味ある芋の足
 探丸
 象議に何の味あるハ情かす、りといふこ
 何の味あると書せりハ流あり芋の足の蜻

新編 甲州 浮城 抄

といへり大工は新旧の式ともには噂なうは句
 衆談よは句の大工は噂なれば人倫打越おし
 膳の足大工はつりぬものやう
 花花我心心な了し
 花花ハ顛倒なり花花我心我心のころな水ハ
 西西答答詠詠花花に存やお家ころろ花花我心心心
 脇ハ菜欄を詠るその場を趣向に定て萩の蘆
 とはわひしき住居の時宜あう月は尊影の移
 ひにしと草花の繁きといふし
 るかことく醫家の良を誉たり挨拶の句なり
 脇ハ菜欄を詠るその場を趣向に定て萩の蘆
 とはわひしき住居の時宜あう月は尊影の移
 ひにしと草花の繁きといふし
 西西答答詠詠花花に存やお家ころろ花花我心心心

とに自如有り衆談に及はす
 高田なす醫師何某の許にて
 茶欄にいづ水の花を竹枕
 蕨の蘆をあけりりる月
 踏雪
 衆談よは句ハ安言葉の調ひたるを種の夜の
 気色に足すためと旅寝よ月の趣向にしと萩
 の蘆をあけりりる月ハ句作を句ハいつれとい
 不所に眼と附し菜欄に百并千草の花の紅
 白白燭燭と咲る風安よせとかの韓退子が牛牛
 漫馬漫勅勅敗敗靴靴の皮もたくハて用を待といハ
 新編 甲州府志

しといへるかミクすくならんしす少し曲
 をたゝ味なれよクラ其幸ハにかくカク菹菜はくす
 のくるししを根くといふしさて味あす物
 之祖のえうひ玉句を撰センに象談す事抜去
 しては二集は足やうに口傳あり然るに能滑
 は續猿蓑に出たり前後猿蓑集ハ氣の自選に
 詩歌連体とにも考逸とて古人もたりは句
 るとハ句作の沙汰にして趣向ハ情の深きを
 かりて死物なり元元姿を足にして情を後にす
 リ何の味なきといへハ何の凡情もなく姿は

にかきらす人倫所起なし初心の人象談に述
 せらるる象談は扇と物と書といへハ雜な
 りといへり扇に物と書といふて雜とはかり
 ばいひかたし季に用あは夏に用ゆし
 二何れ月の事は古今物に委し象談に及はず
 晴蛉や何の味あす竿の足
 探丸
 象談は何の味あすハ情がすゝむといふて何
 の味あすと合せハ誤なり竿の足の晴蛉ハ
 姿たしかにして何の味あすととらはやした
 了ハ活潑潑地の御きありて是我家の脈路な

新編 甲州草紙

けふ限の春の行かや帆かけ舟
 許六
 朧夜は白洒るりの名跡かな
 支考
 とりつゆぬ力こころかふ既かふ
 大川
 鳥の吷をさかさまに初音哉
 其角
 花の雲鐘は上野か浅草か
 翁
 室の論い鳴呼かまし
 何の趣向もなく雅な所も有し
 徒然カキコトなり晝
 一をのがさかすにて自在フ一し
 廿二句ハ
 ばすか一なり亮句は一趣向と足出し二句作
 廿二句に虚實ありといふものハ初子とすと

たくしニ楚滑楚の言地なり
 博多より一筆屋のたより哉
 五もし加と回とを詠とるこけり層に一
 筆ののたよりハ穂武以来二千年にして甚た
 古し
 衡陽雁断三千里と作りはつ層や一聲と一
 く文字か濁と吟す和漢是等の手つまを欠る
 一し
 高けては腰にさし水ぬ扇哉
 たしまねハ腰にさし水ぬ扇かな

と是之たり人多きさるハ長欠の念仏も未
 夫は光明を放つと心得了後生頼みの迷ふと
 おなしか了一し
 近年切字なき句を足たりにする事ハ切字と
 いふ切字といふ細をしらさ水はなり言
 旨法印曰歎にゆ切字一断一所ある一二所
 にて切字はわろきなり云、但し切字なきの
 句は法存て法なしともいふ一し俳門初人の
 人は是つとて切字の置やうを習ふ一し
 抗た木も伐すにあけハ雪の花

桐の葉に埃のたまり暑き哉 ちり 孤屋
 辰に墨つく思のすい哉 千那
 江戸家や猪の臥芝の起あかり 吉来
 初秋やそろりと歎に蚊屋の脚 彦之助
 薪ともなりて朽ぬる栗山子哉 二秀
 とし暑は扇もひかす寒き哉 園女
 初しくわ猿も小裏をほしりなり 杯 翁
 是季の姿をよくく 祝季しと余句の 杯 翁
 雪ふ一し抱には出まめせいふてこそけれそ
 けりの手お波こまさくし是を能潜の修行地

あつこ山や吹浦のりて夕端にけやハ口念の
 働きありしかりにさかき吹は何の所いり滑もな
 く完句附句も字餘り多し是不作との葉な
 り歌に中飽病ちゆうぼうびょうのいおしめあはは俳諧にし何
 そとたりに字あまりをせんや

一鑑草 十二月 芽張柳

芽張柳ハ新旧の式とも春なり十二月芽物
 芽さすとあるハ内に芽さす事なり木の芽と
 いふ芽はるといふは外にありハるゝなりす
 了か冬うすに芽さして葉落はふち因て葉落を冬

伐すにと理屈にかゝつて眼界せまし
 これ足るも杖杖はきし雪の花
 といは、足深し廣く印字の働きもあつてよ
 し句源の新文にはあゝ見せて平句にも各句
 のさまあり

平句 柳妻の宿うちこほす膳の上
 春の柳妻や宿うちほす膳の上

一字餘の事 月之小はるゝにしりこそか左
 しりか病多むとつつの秋にはあ、何と或人曰
 け哥はの字餘りたるか、浪路の拍子よし

新編 甲州屋抄

附録 (主名、作者以外畧す)

伊達	に	着	た	笠	に	つ	こ	込	若	菜	哉	且	水							
板	の	間	に	高	脚	つ	か	ふ	寒	さ	哉	北	漢							
半	分	ハ	さ	く	う	に	奪	ふ	日	和	か	ふ	二	柳						
三	日	月	の	眼	を	あ	み	な	か	り	柳	か	な	見	凡					
岸	は	風	に	掃	せ	て	今	秋	の	秋		長	浪	津	二	日	坊			
傾	城	も	東	の	な	こ	た	中	温	晴	露	辰	城	二	日	坊	五	香	坊	
而	り	い	は	し	め	ハ	白	し	梅	の	花									
孤	風	の	余	所	行	ず	了	機	か	ふ										
苔	と	も	移	は	や	影	の	ら	や	め	49									

とし牙張を春とす冬日枯し春ハ生す了陰陽
造化の不測にして芽張柳ハ決して春とし了
へしけ一品は鑑車に効ふて近年冬に用了句
教多足中ハ夏に辨すその余の誤ハ牧野す
季節の式を改る事ハその世に明哲の師なる
すハ十目をおさるし

字辱のすかひを訊して討は俗流手紙を本と余
 情は書上の和歌にも優情をとか恥さうんやし
 かの蓮屋兩師の滅後八千里の原に荒あまか
 ことく維横に道をつりて付受秘決に人をまこと
 いし神文に血を穢しこ水（を）路（を）了（す）そのあさほ
 うる一人は月社に命をめりたさるしうすし
 二俳諧の奥義を極めたりとおもおハ眉毛のか
 はさたのゆへありす水の原道二日不（不）流（流）不（不）止（止）
 不行と差蓮ニ老師の再生あうハ（全）盛（盛）に云凡
 の向燈をしうぬ火の心紙葉かた善（善）知（知）尋（尋）安（安）学（学）町

行くるにも橋のえあうしう川
 花道の傾くにニまの紅丹あな
 言武坊
 馬六
 昔世俳諧に云の師なし其師なきにあうすその
 なしといふものは蕉門十哲のうす何某の門と
 いひ何某の流れと偽りて蕉翁の名を賣るがう
 蕉門の藩籬さへ破すしてたし自己の俳諧を弘
 小ハ其師なしといはんも宜なるしそも
 我家の俳諧は天和貞享のわかし古池の蛇に玄
 と倣ゆのうりしと念い道野辺の木橋に人同

新編 甲州府志

ハノ之ヲをわレケ五ノ人トナフ干茲也青老人
以事ノを味見レシニ以て遠キ水ハクアサノ龍耳トシ
ニカレニ改メテセク也其水ニク崎橋陰魚白也

宝曆十三年種

禮陰會

白字

白字

京寺町二條

橋屋法兵衛板

二三ウ

新
加
甲
州
刊
行
製

